

SOHUM 「アースミュージアム」プロジェクト

岩本 泰^{*1}・梶井 龍太郎^{*2}・室田 憲一^{*1}・木下 理仁^{*3}

1. はじめに

本プロジェクトは、教養学部学生が環境・芸術・国際の3専門領域を横断するテーマで幅広い視野と共通の理解を深めることをめざしている。授業のねらいは、以下のとおりである。

私たちが暮らしている地球。私たちが便利で快適な生活をおくることができるようになった一方で、明日の暮らしが保証されていない人々も、この地球上で同じ時間を過ごしている。そうした問題の本質に、日本で暮らしている私たちのライフスタイルが深く関係しているとしたら、私たちは何を考え、これからどう生きるべきなのだろうか。

この授業では、過去を学び、現在を見通し、未来を想像し創造する力、すなわち豊かな「人間力」の獲得を目的として、先進的に活動をしている人を招聘したイベントを企画・立案・運営する活動を自ら考え、集い、挑み、成し遂げる体験を通して、履修した学生が社会で活躍する人材に成長することをめざしている。その上で、商業的な利益や経済的な効率に対して批判的思考を持ち、一人一人が共に生きることができる公正な地球社会づくりへの参加に向けた具体的な行動（Action）へのきっかけづくりの場とすることを目的とする。

本年度の授業コンセプトにおいては、前年に引き続き「身近なものの世界とのつながりを考える」であった。

2. 授業の展開

人間学Ⅰは、プロジェクトコア教員に加えて、芸術学科美術学課程の河野孝博氏、デザイン学課程の戸谷毅史、国際学科の小山晶子氏を加えて、7人の専任教員でそれぞれの専門性からの講義を実践した。環境・芸術・国際3領域を横断する多様なテーマでオムニバス形式により

受理日2017年11月22日

*1 教養学部人間環境学科自然環境課程 *2 教養学部芸術学科音楽学課程 *3 教養学部国際学科

授業を展開した。教養学部3年次以降の自己形成科目である「人間学2」の一環としては、人間学1で展開した授業トピックの中で、特にフェアトレードや倫理的（エシカル）消費という具体的なテーマを設定し、プロジェクト授業を展開した。前年までのプロジェクトの成果として、私たちの身の回りにある特に食品や衣類は、生産現場とグローバルにつながっていて、そのサプライチェーンに様々な問題が含まれていることが明らかになった。サプライチェーンとは、ある商品の原料が生産されてから、消費者の手に届くまでのつながりをさす概念である¹⁾。先進国における加工食品や衣類産業は、非常に複雑なサプライチェーンによって成立している。しかも、ここ数十年の間に、輸送、技術、通信などが急速に発達したため、サプライチェーンが非常に長くなりつつある。ある国で生産された製品が、さらに別の国で加工され、さらに別の国で包装され、世界中で販売されるといったことが日常的な事象となる。サプライチェーンが長くなればなるほど、輸送費などが高くなる。それでも発展途上国から先進国へのサプライチェーンはさらに長くなり、一方発展途上国の労働者が劣悪な労働環境や衛生状況にさらされている。特に、労働者の児童労働や人身売買などの人権侵害は、このまま放置できないままななしの問題である。こうした誰かの犠牲により、私たちは便利で安価な商品を手に入れている、という現実の上に現代社会がなりたっている。まさに、持続不可能な開発、といった状況にさらされているのである。

こうした問題を解決すべく、1980年代にオランダで新しい貿易認証制度が誕生した。生産物の最低買い取り価格と安全な労働環境を保証し、発展途上国で働く人々の生活を改善するシステム、フェアトレードが広がりつつある²⁾。フェアトレードは、発展途上国の作物や商品を適正な価格で継続的に購入することにより、途上国の人々の生活改善と自立をめざす貿易の仕組みである。もともとフェアトレードがはじまったのは、1960年代のヨーロッパだが、オランダで1988年に貿易認証制度として確立。その制度の下、フェアトレードラベルのメキシココーヒーが発売された。その後、そのラベルがついた商品を買えば、発展途上国の人々を支援できることが知られるようになり、世界に広まっていった。現在では、イギリスでフェアトレード財団ができたり、アメリカの他いくつかの国でいろいろな団体ができたりしている。日本では、特定非営利活動法人フェアトレード・ラベル・ジャパン（FLJ）がフェアトレードラベル認証事業を展開している。フェアトレードで扱われる商品も、コーヒーやチョコレート、紅茶、砂糖、バナナなど身近な食品や衣類など多様である。

消費者が商品を買うということは、販売する小売店や企業に消費者が欲しいもの、必要なものを伝えていることを意味する。一消費者がフェアトレード商品を買っても、その影響力は限定的だか、一方でこうした消費行動が大きくなるとなり、多くの消費者が買うようになれば、小売店や企業にプレッシャーをかけられる。すなわち、買い物で世界を変える可能性がある。このような流れは、特定の商品を買わないという「ボイコット」に対して、「バイコット」運動として展開される動きもある³⁾。

近年の日本では、「安心、安全」を求めて消費者が組織した生活協同組合（生協）、大型ショッピングモールを展開するイオンなど、小売りの現場に変化の兆しがある。また、市民団体、学校、お店、企業、行政など、地域をあげてフェアトレードの輪を広げる市町村を「フェアト



図1 逗子フェアトレードタウン認定式・認定書



図2 逗子珈琲

レードタウン」として認定する制度も存在する⁴⁾。2011年6月に、熊本市は日本初の「フェアトレードタウン」に認定されている。アジア全体でも初、世界ではちょうど1000番目、という節目であった。また、2015年9月に名古屋市は日本で2番目の「フェアトレードタウン」に認定された。そして、2016年7月には、神奈川県逗子市が日本で3番目のフェアトレードタウン認定をされた。逗子では、「逗子フェアトレードタウンの会」といった市民組織と逗子市市民協働課が協働的に活動を積み上げてきた活動歴がある。また、東ティモール産のコーヒー豆を使用した地域オリジナル商品「逗子珈琲」といった商品販売もすでに実施されており、市内のフェアトレード商品を扱うお店や市役所内でも飲むことができる。

本プロジェクトでは、2016年12月17日に逗子文化プラザ・市民交流センターで公開イベント「フェアトレード最前線～生産と消費の現場をつなぐ」を開催した。今回のイベントでは、東海大学教養学部 SOHUM「アースミュージアム」プロジェクトの「人間学2」を履修している3年次生10名が「逗子フェアトレードタウンの会」に協力し、世界の今と私たちの暮らしとのつながりを考える「国際文化フォーラム in 逗子」の連携企画として実施した。



平井 遼子市長

遼子フェアトレード
タウンの会
磯野さんACE
岩附さん陰陽洞
福田さん非常勤講師
木下理仁

図3 今回お話した来賓・ゲストの皆さんと学生プレゼンテーションの様子

当日は、平井竜一遼子市長のあいさつに続いて、特定非営利活動法人「ACE（エース）」代表の岩附由香さんが講演した。インドやガーナで子どもたちを危険で有害な労働から守り、教育を支援する活動に取り組みながら、製菓会社と共同でフェアトレードのカカオ豆を使ったチョコレートの商品開発している、といった活動内容を紹介した岩附さんは、「支援期間を過ぎても子どもたちが労働をせず、適切な教育を受けられるように、現地の人たちの意識を変えていくことが重要で、2009年からは“しあわせへのチョコレートプロジェクト”を立ち上げ、日本の企業や消費者と協力して児童労働のないチョコレートが当たり前に入る社会の実現を目指して活動しています」といった話をした。次に、遼子市内でオーガニック食材を扱う有限会社陰陽洞の福田妙子さんが登壇。「お客さんと話をしていると、フェアトレードについてよく知っている人と知らない人の格差が大きいように感じます。商品の説明をするときに生産現場の状況もあわせて伝えていくことを大切にしています。現地の人が食べているものをそのままフェアトレード商品として扱っていきけるよう、新しい商品の開発も手がけていきたい」と今後の展望を語った。

その後、学生たちが2チームに分かれて“自分たちにできること”をプレゼンテーションした。チョコレートチームは、フェアトレードに対する認知度の低さを紹介しながら、バレンタインのキャンペーンを例にSNSを活かした情報発信やプロモーションについて提案。「若者のフェアトレードの意識を高め、逗子市にその商品を買いに来てもらえれば」といった話をした。ファッションチームは、東海大生に対して行った「どこの国で作られた服を着ているか、服を選ぶ基準、どこで買うか、フェアトレードを知っているか」についての調査・インタビュー結果を披露し、「若者向けではない、男性物の服が少ないという課題が見えてきました。中学校や高校でフェアトレードについての授業を取り入れ、学校の制服に使うことで身近に感じてもらうたりできればいいと思います」と語った。

参加者からは、「フェアトレードについて自分の中であいまいだった部分が解決でき、すっかりしました」「世代や立場の違う方々のお話は面白く聞きました。やはり、最前線の方の新しい情報は刺激的でした」といった感想が聞かれた。

3. おわりに

今回のこうした企画を通して逗子市は、これまでの活動の積み重ねもあり、フェアトレードについて市民意識が比較的に高いことがわかった。また、一般参加者の意識も高く、学生のプレゼンテーションの内容については課題も残された。さらに、2017年11月に日本で4番目のフェアトレードタウンとして、浜松市が認定された。ただし、こうした認定は、認定後3年をめぐりに再認定のチェックが行われる。フェアトレードタウンの輪が広がったことは、新たな段階に入ったことを意味するが、逗子市としては持続可能なフェアトレードタウンであるために、なぜ、誰のために、フェアトレードが必要なのか、といった本質的な問題意識の共有や広がりが求められている。こうした点において、大学の授業として実施されている内容や教育方法は、地域でニーズがあるため、今後も本プロジェクトや授業を通して、新たな地域連携を模索したい。

4. 謝辞

本実践は、2016年度の東海大学教養学部教育研究補助金により実施された。関係各位に感謝申し上げます。また、逗子フェアトレードタウンの会関係者、逗子市、ACE 岩附さん、陰陽洞福田さん、そして本イベントにご協力いただきましたすべての皆様には、本プロジェクト実践に参加した学生の成長のきっかけとなる機会をいただいた。改めて、この場にてお礼を申し上げます。

注

- 1) ケイティ・ディッカー、信じられない「原価」 買い物で世界を変えるための本 3 食べ物、講談社、p.10
- 2) 前掲書、p.40

3) 現在は、活動を行っていないが、例えば以下のようなキャンペーンが展開されたことがある。
以下の HP を参照。

<http://www.carrotmob.org/>

4) 渡辺龍也, 考えよう! やってみよう! フェアトレード 3 日本のフェアトレードの現状と
きみにもできること, 彩流社, pp.18-19